

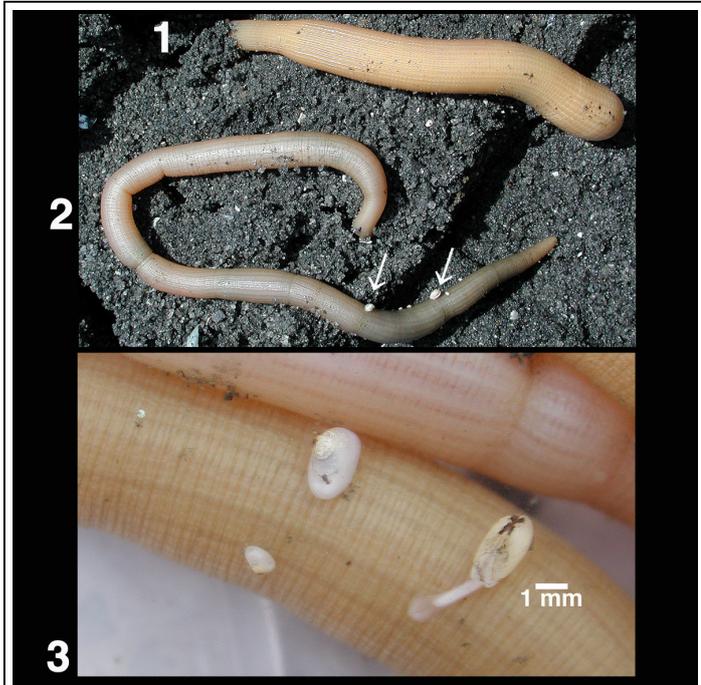
スジホシムシモドキヤドリガイ *Nipponomysella subtruncata* (Yokoyama)

【選定理由】

本種は、内湾河口域の砂泥干潟の底質中に深く潜って生息するスジホシムシモドキ (環形動物；図 2) の体表に付着して生息する微小な二枚貝 (図 2 に矢印で示す)。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種と共生関係にあるスジホシムシモドキの生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。本種がスジホシムシモドキの体表に付着している割合は通常 1 割程度 (木村, 2004) で、結果として県内では生息地も個体数も少なく、希少な貝類である。引き続き、絶滅の可能性が高い種であると評価された。

【形態】

殻長 2-4 mm 程度で殻は白色で楕円形、殻頂部は後端にある。殻は薄く、殻表は平滑。



1: スジホシムシ, 2: スジホシムシモドキ, 3: スジホシムシモドキヤドリガイ, 蒲郡市三谷地先人工干潟, 2005年7月21日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美半島北側の三河湾で 2 地点 (愛知県, 2005; 木村, 2004)、蒲郡市三谷地先人工干潟 (木村, 2004) で確認されたが、2004 年以降生息が確認されていない。その後、西尾市旧幡豆町 (早瀬・他, 2011)、近年の三河湾の島嶼域の調査で、沖島 (早瀬・他, 2015)、佐久島 (早瀬・木村, 2020) でも生息が確認されたが、生息地点数、個体数ともに少ない。

【世界及び国内の分布】

日本でのみ記録されている。国内では浜名湖～九州、南西諸島に分布する (木村・久保, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているため、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

本種はスジホシムシヤドリガイ、スジホシムシノヤドリガイなどの和名で呼ばれたこともあるが、本種のホストはスジホシムシ (図 1) ではなく、スジホシムシモドキ (図 2) なので、スジホシムシモドキヤドリガイ (稲葉, 1982) が本種の生態を的確に表す和名として採用された (木村, 2012)。

【引用文献】

- 愛知県, 2005. 沿岸生態系保全の考え方-干潟生態系を中心として-。
早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士, 2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相. 東海大学海洋研究所研究報告 (32): 1-33.
早瀬善正・木村昭一・大貫貴清, 2015. 沖島 (三河湾) の転石地潮間帯の貝類相. かきつばた, (40): 23-30.
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
稲葉明彦, 1982. 瀬戸内海の貝類. 181pp. 広島貝類談話会, 広島.
木村昭一, 2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, (30): 14-20.
木村昭一, 2005. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相 続報. かきつばた, (31): 29-31.
木村昭一・久保弘文, 2012. スジホシムシモドキヤドリガイ, p. 161.in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野。

(木村昭一)